

# 『河童』は反出生主義か？

ともに公共する(生命開新) 美学をともにデザインする  
ワークショップ

第150回

2024.4.23 (火) 19:00~ 片岡龍

・ 「反出生主義」ってなに？ 現代人はなぜ反出生主義に共感するのか

DINKS MAGAZINE 2023.01.23 <https://dinks.jp/antinatalism/>

- 1、反出生主義を唱えた代表的な人  
ショーペンハウアー、ザプフェ、  
シオラン、ベネター
- 2、反出生主義が描かれている作品  
芥川龍之介『河童』、太宰治『斜陽』
- 3、反出生主義を肯定する人は現代にも多い
- 4、なぜ現代人は「反出生主義」に共感するのか



## 『河童』【青空文庫版】 出産描写箇所

底本：『芥川龍之介全集 第十四巻』 岩波書店、1996年12月9日発行

底本の親本：『改造』 第九巻第三号、1927年3月1日発行

### 四

僕はだんだん河童の使ふ日常の言葉を覚えて来ました。従つて河童の風俗や習慣ものみこめるやうになつて来ました。その中でも一番不思議だつたのは河童は我々人間の真面目に思ふことを可笑しがる、同時に我々人間の可笑しがることを真面目に思ふ——かう云ふとんちんかんな習慣です。

たとえば我々人間は正義とか人道とか云ふことを真面目に思ふ、しかし河童はそんなことを聞くと、腹をかかへて笑ひ出すのです。つまり彼等の滑稽と云ふ觀念は我々の滑稽と云ふ觀念と全然標準を異にしてゐるのでせう。

僕は或時医者の子ヤツクと産児制限の話をしてゐました。すると子ヤツクは大口をあいて […] 笑ひ出しました。僕は勿論腹が立ちましたから、何が可笑しいかと詰問しました。何でも子ヤツクの返答は […] 「しかし両親の都合ばかり考へてゐるのは可笑しいですからね。どうも余り手前勝手ですからね。」

その代りに人間から見れば、実際又河童のお産位、可笑しいものはありません。 […] お産をするとなると、父親は電話でもかけるやうに母親の生殖器に口をつけ、

「お前は这个世界へ生れて来るかどうか、よく考へた上で返事をしろ。」と大きな声で尋ねるのです。バツグもやはり膝をつきながら、何度も繰り返してかう言ひました。 […]

すると細君の腹の中の子は多少気兼でもしてゐると見え、かう小声に返事をしました。

「僕は生れたくはありません。第一僕のお父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです。その上僕は河童的存在を悪いと信じてゐますから。」

バツグはこの返事を聞いた時、てれたやうに頭を搔いてゐました。

が、そこにゐ合せた産婆は忽ち細君の生殖器へ太い硝子の管を突きこみ、何か液体を注射しました。すると細君はほつとしたやうに太い息を洩らしました。同時に又今まで大きかつた腹は水素瓦斯を抜いた風船のやうにへたへたと縮んでしまひました。

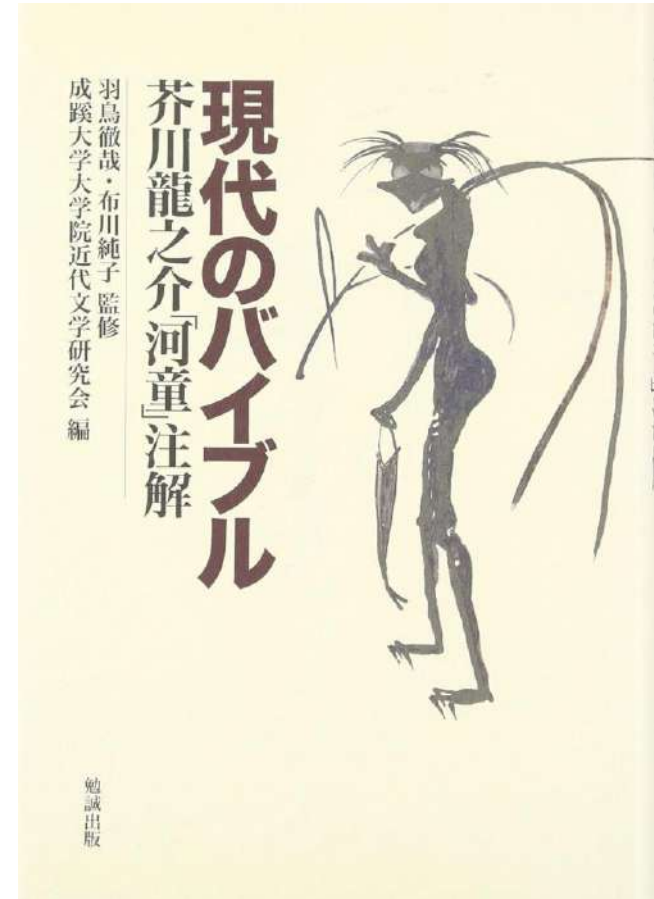
# ・『現代のバイブル：芥川龍之介「河童」注解』の解説

<四>では、人間と河童の習慣がしばしば逆になることが語られる。

河童は<正義>とか<人道>と聞くと、腹を抱えて笑う。ここでは、正義の名の下に各国が勢力争いをした第一次世界大戦の事や、人道主義を掲げた白樺派の事が意識されていると思われる。芥川は<正義>や<人道>というものの中に、エゴイズムを覆い隠し、正当化する偽善を見たのだろう。

また、河童は<両親の都合ばかり考へ>る人間のお産を、<手前勝手>であると笑う。人間の世界では親が出生を決定するのに対し、河童の場合は子供の意志が尊重される点で、スウィフトの『ガリバー旅行記』やサミュエル・バトラーの『エレホン』の影響がみられる。

出生を拒否する胎児の<お父さんの遺伝は精神病だけでも大へんです>という言葉には、芥川自身の遺伝に対する不安が窺える。当時精神病は遺伝すると考えられていたので、芥川は母親の遺伝によって自身も発狂するのではないかと恐れていた。また、<河童的存在を悪いと信じてゐますから>という言葉には、芥川の人間不信、現実世界への嫌悪が反映されている。(87頁)



・坂本明日香「「告白」が示す希望のきざし —芥川龍之介『河童』における可能性」

[...] 芥川の自伝的事実からいえば、「精神病」のあったのは「お母さん」である。そのためこの場面は、「お母さん」というべきところを作品上「お父さん」にしておき、その上で発狂の遺伝への恐怖を述べていると推察するのが一般的である。確かに「僕は生れたくはありません。」という台詞だけ見れば、「自分は生れて来たくなかった」という、**芥川自身の不満や文句にも似た恐怖**を反映しているようにも見える。

[...] 芥川は、母の発狂の遺伝を恐れる一方で、**自分の子供にもそれが遺伝してゆくことを恐れた**。芥川の遺稿である「或阿呆の一生」の<二十四 出産>に、次のような台詞がある。

「なんのためにこいつも生れて来たのだろうか？この娑婆苦の充ち満ちた世界へ。——なんのためにまたこいつも己のようなものを父にする運命になったのだろうか？」

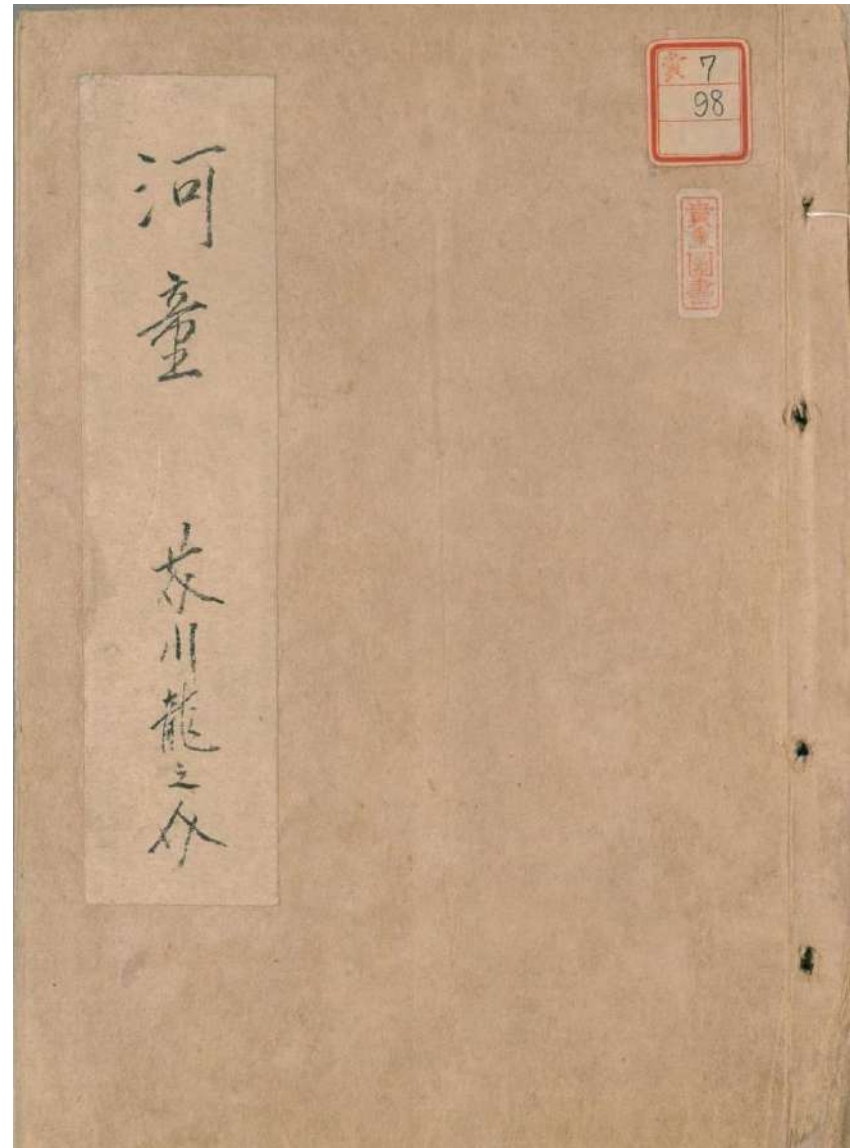
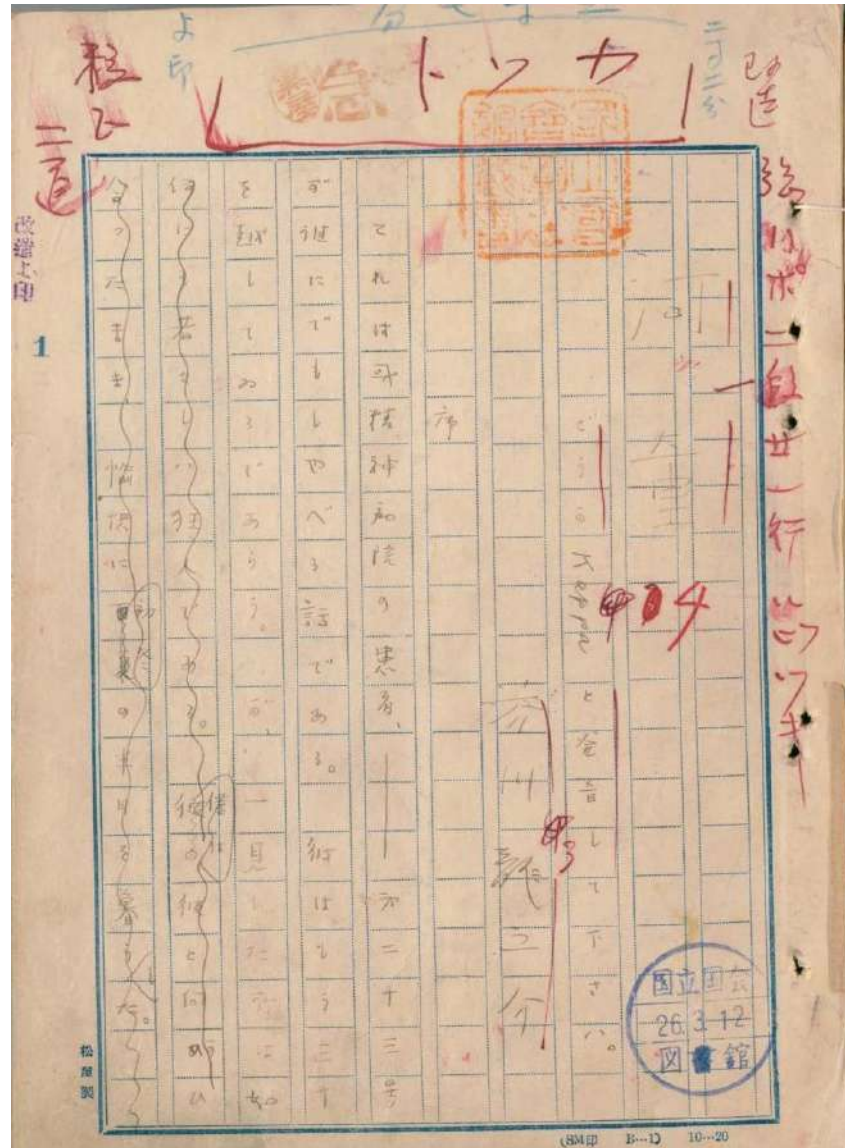
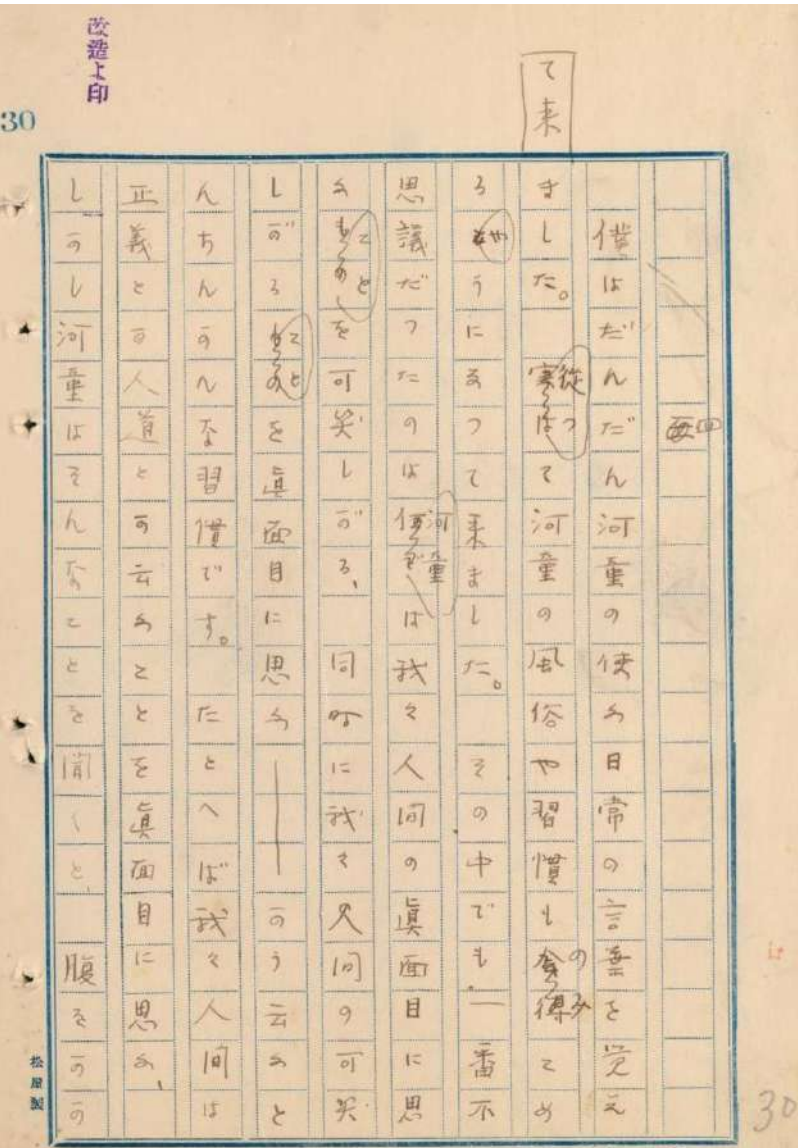
『河童』には、自己(芥川)の視点と他者(子ども)の視点が混在している。

前者を強調すれば「反出生主義」となるが、後者を強調すれば「対話可能性」(「子供の意志」だけではない)が開かれる。

つまり、反出生主義には「他者」(との対話可能性)の視点が欠如している？

# 国立国会図書館所蔵の芥川龍之介「河童」自筆原稿

※末尾に永見徳太郎筆になる「河童原稿縁起記」一枚を貼付





## 三[四]

僕はだんだん河童の使ふ日常の言葉を覚え[て来]ました。実は河童の風俗や習慣も会得[のみ]こめると[や]うになつて来ました。その中でも一番不思議だったのは何で[河童]は我々人間の真面目に思ふもの[こと]を可笑しがる、同時に我々人間の可笑しがるもの[こと]を真面目に思ふ——かう云ふとんちんかんな習慣です。

たとえば我々人間は正義とか人道とか云ふことを真面目に思ふ、しかし河童はそんなことを聞くと、腹をかかへて笑ひ出すのです。つまり彼等の滑稽と云ふ観念は全然我々の滑稽と云ふ観念と全然標準を異にしてゐるのせ[で]せう。

僕は或時一匹の河童と、——バックと云ふ名の[僕の最初に會つた[バックと云ふやつと[河童と[醫者のチャックと]]]] 孝行[産児制限]の話をしてゐました。するとバック[チャック]はびっくりするほど[のけぞったまま、[大口をあいて]] [...] 笑ひ出しました。僕は勿論腹が立ちましたか(?)[か]ら、何が可笑しいかと詰問しました。

へて笑ひ出す。つまり彼等の滑稽と云  
 念は全多我々の滑稽と云ふ観念と全多  
 準と異にしてゐるの如せう。僕は或時  
 河童の如きものかと思ふ。自筆金の落  
 大は口をあらはして、僕が分論腹が  
 可笑しかつた。僕が分論腹が  
 何れも少くも大体可なりうた。何  
 りす。

作者のチヤツク  
 老翁の眼  
 話としておました。

何でもチヤツク[バック]の返答は [...]
 「しかし[両] 親の都合ばかり考へてゐる  
 のは可笑しいですからね。どう考へ[も滑稽  
 に[も余り手前]]勝手ですからね。」

[...]

「僕は生れたくはありません。元  
 (?)[第]一僕のお父さんの遺伝は**黴毒**[精  
 神病]だけでも大へんです。その上僕は河  
 童的存在を悪いと信じてゐますから。」

[...]

バックと孝行の話



家族における  
親子間交流

チャックと産児制限の話



家族における  
親子間交流

+

社会における  
世代間交流

## 『河童』十六【青空文庫版】

僕は […] だんだんこの国にゐることも憂鬱になつて来ましたから、どうか我々人間の国へ帰ることにしたいと思ひました。しかしいくら探して歩いても、僕の落ちた穴は見つかりません。そのうちにあのバツグと云ふ漁師の河童の話には、何でもこの国の街はづれに或年をとつた河童が一匹、本を読んだり、笛を吹いたり、静かに暮らしてゐると云ふことです。 […] そこへ行つて見ると、如何にも小さい家の中に年をとつた河童どころか、頭の皿も固まらない、やつと十二三の河童が一匹、悠々と笛を吹いてゐました。 […]

「 […] あなたは子供のやうですが……」

「お前さんはまだ知らないのかい？ わたしはどう云ふ運命か、母親の腹を出た時には白髪頭をしてゐたのだよ。それからだんだん年が若くなり、今ではこんな子供になつたのだよ。 […]」

僕は部屋の中を見まはしました。そこには僕の気のせゐか、質素な椅子やテーブルの間に何か清らかな幸福が漂つてゐるやうに見えるのです。

「あなたはどうもほかの河童よりも仕合せに暮らしてゐるやうですね？」

「さあ、それはさうかも知れない。わたしは若い時は年よりだつたし、年をとつた時は若いものになつてゐる。従つて年よりのやうに慾にも渴かず、若いもののやうに色にも溺れない。兎に角わたしの生涯はたとひ仕合せではないにしろ、**安らか**だつたのには違ひあるまい。」

「成程それでは安らかでせう。」

「いや、まだそれだけでは安らかにはならない。わたしは体も丈夫だつたし、一生食ふに困らぬ位の財産を持つてゐたのだよ。しかし一番**仕合せ**だつたのはやはり**生まれて来た時に年よりだつた**ことだと思つてゐる。」

[…]

「ではあなたはほかの河童のやうに格別**生きてゐることに執着を持つては****みない**のですね？」

年をとつた河童は僕の顔を見ながら、静かにかう返事をしました。

「わたしもほかの河童のやうに**この国へ生まれて来るかどうか、一応父親に尋ねられてから母親の胎内を離れた**のだよ。」

「しかし僕はふとした拍子に、**この国へ転げ落ちてしまつた**のです。どうか僕にこの国から出て行かれる路を教へて下さい。」

「出て行かれる路は一つしかない。」

「と云ふのは？」

「それはお前さんのここへ来た路だ。」

僕はこの答を聞いた時になぜか**身の毛がよだちました**。

「その路が生憎見つからないのです。」

年をとつた河童は水々しい目にちつと僕の顔を見つめました。それからやつと体を起し、部屋の隅へ歩み寄ると、天井からそこに下つてみた一本の綱を引きました。すると今まで気のつかなくつた天窓が一つ開きました。その又円い天窓の外には松や檜が枝を張つた向うに大空が青あをと晴れ渡つてみます。[…]僕は飛行機を見た子供のやうに**実際飛び上つて喜びました**。

「さあ、あすこから出て行くが好い。」

年をとつた河童はかう言ひながら、さつきの綱を指さしました。今まで僕の綱と思つてみたのは実は綱梯子に出来てみたのです。

「ではあすこから出さして貰ひます。」

「唯わたしは前以て言ふがね。出て行つて後悔しないやうに。」

「大丈夫です。僕は後悔などはしません。」 […]

〈十六〉では、「ふとした拍子に、この国へ転げ落ちてしまった」(=自分の意志でなくこの世に生まれてきた)「僕」が、「人間の国へ帰ることにしたい」(=自分の意志でこの世に生きたい)と願い、子どものような「或年をとつた河童」のもとを訪れ、「運命」と「幸福」をめぐって対話する。

対話を通じて、「生きてゐることに執着」のなさそうなこの河童も、やはり「この国へ生まれて来るかどうか、一応父親に尋ねられてから母親の胎内を離れた」ことを知った

「僕」は、自分の「運命」(=不可測の未来)に「身の毛がよだ」つ恐怖を感じながらも、子供のように喜んで、最後にまた対話による合意を交わして、人間界に戻ることを選ぶ。

## 話題提起

- ・『河童』は、「反出生主義」的な「自己」(芥川)の視点を、「運命」を受け入れる(=不可測な未来を楽しむ)ことが「幸福」とする考えによって、自己否定、世界否定を克服しようとしているのでは？
- ・人間の世界には「狂人」の独白か対話の断絶（「出て行け！ この悪党めが！ 貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、凶々しい、うぬ惚れきつた、残酷な、虫の善い動物なんだから。出て行け！ この悪党めが！」）しかないのに対し、河童の世界には対話が満ち溢れているのでは？
- ・反出生主義には「他者」（との対話可能性）の視点が欠如しているのでは？



# 河童原稿縁起記

昭和二年七月十五日の朝芥川龍之介  
〔氏〕よりスグコイの電報が届けられた。  
田端の澄江堂の二階にて雑談する前、  
是を永見氏に進呈しやうと差出された  
のが、この河童原稿であつた。その日  
二人は夜おそく迄散歩して或一軒の甘  
い物屋に入った。その十日目が、彼氏  
のパライソ昇天であつた。

歳月は二十数年が過ぎ、去年の祥月命  
日、私は君を偲び、とある店にて二椀  
のおしるこを注文し、一ツは君の靈に  
とさゝげた。その時たはむれの作歌を  
胸に染めた。

ぱらいそに 河童聖人 おはすかや  
椀に汁粉盛り たてまつりてお

昭和廿三年春の花さく日  
徳見記

## 河童原稿縁起記

昭和二年七月十五日の朝芥川龍之介よりスグコイの電報が届けられた。田端の澄江堂の二階にて雑談する前、是を永見氏に進呈しやうと差出されたのが、この河童原稿であつた。その日二人は夜おそく迄散歩して或一軒の甘い物屋に入った。その十日目が、彼氏のパライソ昇天であつた。

歳月は二十数年が過ぎ、去年の祥月命日、私は君を偲び、とある店にて二椀のおしるこを注文し、一ツは君の靈にとさゝげた。その時たはむれの作歌を胸に染めた。

ぱらいそに 河童聖人 おはすかや  
椀に汁粉盛り たてまつりてお

昭和廿三年春の花さく日

徳見記